

少年サッカークラブのローカリティ

後 藤 貴 浩

1. グローバルなサッカー人生～中村氏のライフヒストリー～

本稿では、シンガポールの少年サッカークラブ「GLOBAL FOOTBALL ACADEMY」（以下、GFA とする）と埼玉県幸手市の上高野少年サッカークラブ（以下、上高野 SC とする）の2つの少年サッカークラブを取り上げ¹⁾、そのローカリティについて論じる。2つのクラブをつなぐ人物は中村彰宏氏である。中村氏は2018 年まで GFA の代表を務め、帰国後、2020 年から出身地の幸手市で父親が創設した上高野 SC の代表を務めている。

中村氏は、1977 年に埼玉県幸手市で生まれた。小学校では、当時、父親が代表を務めていたスポーツ少年団の上高野 SC で、中学校では部活動でプレーしてきた。同年代のチームメイトには能力の高い子どもたちが集まっていたことから、小学校では県大会出場、中学校では埼玉県で優勝するなどの好成績を残した。中心選手だった中村氏は、高校進学時にサッカー留学をすることを決意し、千葉県の私立高校（東海大学浦安高校）に進学した。高校時代は、全国大会出場はなかったものの、強豪校の集まる千葉県で常に上位を争い、チームではキャプテンを務めた。

大学は、系列校の東海大学に進学し、神奈川県リーグ所属ではあったが、4 年次には関東大学リーグ 2 部に昇格した。当時を振り返り「J リーグにいけるレベルではなかった」という中村氏は、一般企業（営業職）に就職（東京都）した。就職したころは、「大学でサッカーをやりきった感があった」ので、遊びでフットサルをしていたぐらいであった。ところが、社会人 2 年目に、シンガポールのプロサッカーリーグ（S リーグ）のチームが、日本人選手獲得のためのセレクションを開催するという情報を得て、偶然にも仕事が休みだったこともあり受験することとした。結果、

「とりあえず受けてみたら合格」したということであったが、その頃、知り合いのＪリーグのスタッフや選手の話を書く機会などもあり、もう一度サッカーをしたいという気持ちになっていた。中村氏は、プロサッカー選手になることを決断し、すぐに会社に辞表を提出した。会社側は「夢」を追いかけるのであればということで快く送ってくれたという²⁾。

2002年にＳリーガーとなった中村氏は、2012年までの11年間、計6チームに所属し、Ｓリーグにおける日本人最長在籍期間及び最多出場試合を記録した。日本人プロサッカー選手だけでなく、ローカルの選手やシンガポールサッカー協会の関係者にも一目置かれる存在となった。Ｓリーグ在籍3年目には、高校・大学で同級生だった女性と結婚した。プロサッカー選手としての生活も安定し始め、海外で働くことを希望していた彼女の就職先がシンガポールで得られたのを機に結婚を決意したのである。その後、中村家では、3人の子ども（長女と双子の男の子）に恵まれ、2019年に帰国するまで家族5人で暮してきた。

中村氏は、プロサッカー選手として活躍する一方で、少年サッカークラブであるGFAの設立に向け動き出していた。そのきっかけは、Ｓリーグ4年目に所属していた日系チーム「アルビレックス新潟シンガポール」の下部組織（少年サッカースクール）の立ち上げに関わったことにある。「アルビレックス新潟シンガポール」には1年間所属し、ローカルチームへと移籍することになったが、少年サッカースクールの指導で知り合った駐在員の子どもたちへの個人指導を依頼されたのである。2005年に始めた3人の子どもたちへの公園での指導がGFAのスタートとなり、その後、所属したローカルチームの育成部門の関連事業として週2回のサッカースクールへと展開していった。

そして、「アルビレックス新潟シンガポール」のサッカースクールの活動中に知り合ったのが、のちにGFAの共同経営者となる斎藤泰一郎氏である。斎藤氏は、中村氏よりも早くシンガポール（2部リーグ）でプレーしていた人物である。二人は少年サッカースクールの指導をしながら、日本人駐在員の子どもたちを

対象³⁾にした少年サッカークラブの事業化を構想したのである。その後、斎藤氏はオーストラリアの3部リーグやガーナリーグでプレーすることになったが、再びシンガポールに戻ってきたときに、中村氏のサッカースクールの法人化について検討し始めた。そして2009年、中村氏は現役Sリーガーという立場のまま、斎藤氏と共同出資しGFAを法人化したのである。さらに、2011年の引退（2012年にローカルチームからの要望で一度再契約した）を機に、後述するように、フットサルスクール、レディーススクール、Sリーグトライアウトへと次々に事業を拡大した⁴⁾。

結果、25歳でシンガポールに渡った中村氏は、Sリーガーとして少年サッカークラブの指導者として17年間を現地で過ごした。当初は、「2～3年プレーして帰るつもり」だったが、ローカルの強豪チームに移籍することができたことや妻がシンガポールで就職したこと、また徐々にサッカースクールの子どもたちが増えてきたこともあり、日本に帰る気持ちはなくなったという。経済的にも安定し、郊外の一軒家を住居とし2名の家政婦を雇う暮らしぶりだった。

しかし、2014年に自らのサッカー人生の最大の理解者であった父親が亡くなった。少年時代に所属した上高野少年SCを立ち上げ、自分のサッカー人生を力強く支えてくれた父親の死は、その後の人生や家族のことを考える契機となった。さらに、子どもたちが成長するにつれ、将来日本に戻るのであれば日本での教育を受けたほうが良いのではないかと考えるようになった。加えて、父親の後を継いで電設会社の社長となった兄からも、帰国し会社に勤めるように勧められた。結果、2019年に斎藤氏との話し合いのもと、GFAを日系企業に売却し、家族で帰国することになった。

2. GFA ファミリー

中村氏が、斎藤氏とともに創り上げたGFAとはどのような少年サッカークラブだったのであろうか。筆者が現地調査を行った時点（2016年）で、会員数は約500名（サッカースクール約350名、フットサルなどの会員約150名）で、スタッフは、中

村氏、斎藤氏のほか2名の日本人正職員とアルバイトのローカルコーチ（プロ）4名であった。会員のほとんどは日本人駐在員の子どもたちだが、数名の欧米人やローカルの子どもたちも在籍していた。大半が日本人であることから、使用する言語は日本語であり、練習風景は日本の少年サッカークラブと何ら変わりがない。

少年サッカーチームとしての試合は、日本人大会（シンガポール日本人会主催など）や他のクラブ主催の大会が年間を通して数回開催されている。ジュニアユースのチームは、マレーシアやカンボジアで開催される大会に出場することもある。シンガポール国内の日系人のジュニアサッカースクールはGFAのほか、アルビレックス新潟シンガポールの育成チーム、シュート（元日本代表選手が主催するクラブ）、日本人会が運営するスクールの4つが活動している。GFAのジュニアチームの月会費は、週1回コースで80シンガポールドル（約6,500円）と他の欧米系のスクールよりも安価な設定になっている。また、2013年には子どもたちの多くが通っている2つの日本人学校を巡回して練習会場に送迎（有料）するバスを用意し安定的な会員獲得につなげている。GFAの中心事業は、少年サッカースクール（教室）であり、その中からチームとして活動する選手たちを集め大会等に出場する。表1に1週間のスケジュールを示しているが、少年サッカースクール以外に、大人のフットサル教室や大会の主催、幼稚園での運動指導、スポーツビジネスを志す日本人インターンシップ生の受入なども手掛けている。

表1 GFAのスクール事業週間スケジュール

月曜日	休み
火曜日	午前：レディースフットサル 午後：キッズスクール
水曜日	午後：ジュニアスクール
木曜日	午前：レディースフットサル 午後：男女フットサル
金曜日	午後：キッズ・ジュニアスクール 夜：男女フットサル
土曜日	午前：ジュニアユースチーム、キッズスクール
日曜日	午前：ジュニアユース・ジュニアチーム、女子・キッズ・ジュニアスクール

また、中村氏、斎藤氏のようにシンガポールでのプレーを希望する日本人選手をSリーグチームに斡旋するトライアウト事業も行っている。このトライアウト事業の一環として2部リーグに所属するクラブの運営にも乗り出した⁵⁾。日本から来てプロ契約を目指す選手たちのなかには、このクラブ（アマチュア契約）でプレーしながらSリーグチームへの移籍を目指す選手もいる。同時に、彼らはGFAのアルバイスタッフとしてスクール事業の貴重な戦力ともなる。さらに、障がい者向けのサッカー大会の開催などのCSR事業も展開し、シンガポールのサッカー振興に寄与する活動にも取り組んでいた。

このように少年サッカー指導を中心にさまざまなサッカービジネスに挑戦しているが、それを支えるスタッフについて、2014年の調査時の状況から確認しておこう。当時は、中村氏、斎藤氏以外に2名の職員と1名のインターンシップ学生（3か月）が従事していた。職員の一人周詞氏は、長崎県の国見高校、国土館大学と国内のサッカー強豪校で実績を積み、Sリーガーになることを目指しGFAのスタッフとして働いていた。GFAが運営する2部チームでプレーしながら、サッカースクールのコーチや幼稚園の体育指導に携わっていた。もう一人の鈴木氏は、学生時代からスポーツビジネス業界への就職を希望していたことから、2012年に1年間インターンとして働いたあと、大学卒業と同時にGFAの契約社員になった。スクールの運営業務を中心に事務的な仕事のほかスクール指導も行っていた。インターンとしてスクールの指導を手伝っていた福井さん（女性、仮名）は、早稲田大学を卒業後、海外でのスポーツビジネス研修の一環として3か月GFAのスタッフとして働いていた。しかし、2019年の調査時には、インターンを含む3名の職員はすべて入れ替わっており、お父さんコーチを含め、中村氏、斎藤氏以外のスタッフは流動的である。

さて、GFAの活動の最も大きな特徴は、シンガポールの日本人コミュニティ⁶⁾において、いわば“GFAファミリー”というサッカーを通した緩やかな関係性を築いている点にある。この“GFA

ファミリー”はいかにして構築されているのであろうか。

日本的なもの

GFA では、1 年間で締めくくる行事として、ホテルの一室を貸切ったクリスマスパーティーが開催される。参加者は総勢 200 名以上にもなる。小学生から中学生の各学年で出し物を披露するほか、1 年間の活動を編集した動画が映し出され、さまざまな個人賞が授与される。

GFA の子どもたちの多くは駐在員の子どもたちであるため、多くは 3 年～4 年でシンガポールを離れることになる。つまり、短期間での「別れ」を前提とした集団といえる。父親の仕事によっては数か月後にシンガポール（GFA）にいるか定かではない子どももいる。だからこそ、子どもたちだけでなく、その活動を支える親たちも一生懸命に GFA の活動に関わろうとする。このクリスマス会では、動画の撮影・編集から当日の司会・運営などすべて親たちが担っている。どこことなく、日本の学校で卒業時に行われている「謝恩会」の雰囲気を感じさせる会でもある。このクリスマス会のほかにも、親子サッカー大会、保護者の親睦会など日本の少年サッカークラブで「よく見かける」イベントが用意されている。

駐在員の子どもたちは、日本人学校、現地校、インターナショナル・スクールのいずれかに通っているが、日本人学校に通っている子どもが圧倒的に多い。その理由を母親たちに確認すると、「いずれ日本に戻ることになるので、日本の教育や習慣に慣れていて欲しい」という答えが返ってることが多い。そして、他のサッカースクールと比較してなぜ GFA を選択したのかという質問には、「挨拶をしっかりとったり、練習方法が“日本的”だったから」と答えていた。参与観察を通して感じたのは、その“日本的”というのは、中村氏が意識して持ち込むものではなく、コーチと子どもたち、子どもたち同士、コーチと保護者との関係のあり様を示しているのではないかということである。練習に早めに来た子どもたちの宿題を一緒に見てあげるなど、サッカー指導場

面以外での関わりも非常に多い。また、中村氏が、グラウンド外で子どもや保護者と笑顔で話している姿を頻繁に見かけることがある。そのなかで、長くシンガポールに居住する先輩として生活上のアドバイスを送ることもある。そのような日常的な関係性があるからこそ、先のような「クリスマス会」の雰囲気が創り上げられるのではないかとと思われる。

このように、GFAの中にはいくつもの「日本的なもの」が存在する。先に指摘したように、いずれ日本に帰るという環境的条件が影響していることは言うまでもない。それに加えて、一時的であれ共に活動する集団として、「家族」のようにありたいという中村氏の思いもあるように思われる。筆者と雑談する際に、自身の家族の話を書くことがあったが、それと同じような口調でGFAの子どもたちのことを語っていた。GFAに集う人びとはそのような中村氏の言動に「安心感」を覚え、次に示す「父さんコーチ」のように積極的にGFAに関わる人たちが現れてくるのである。

お父さんコーチ

日本ではスポーツ少年団などの地域の少年サッカークラブに「お父さんコーチ」が存在する。この日本式ともいえるボランティアスタッフはGFAにも存在し、貴重な戦力となっている。ここでは3名（すべて仮名）のお父さんコーチへの聞き取り調査をもとに、GFAとお父さんコーチの関係について確認する。

石本氏は、日本で大学や社会人リーグでのプレー経験をもつお父さんコーチである。長女が6歳の時、偶然見たフリーマガジンでGFAのナデシコ（女子）のサッカースクールがあることを知り、体験レッスンに参加し入団を決めた。当初は、送迎等もあり大変だと思っていたが、石本氏自身や妻も大人のフットサルスクールに参加するようになり、家族全員が“GFA ファミリー”の一員となった。中村氏からは、大人のフットサルの練習中に声をかけられ、女子チームのお父さんコーチに就任した。石本氏は、GFAとの関りを次のように語っている。

中村さんとは同じ年で、GFA そのものも素晴らしいですけど、中村さんのように海外でこんなにチャレンジをしている人がいるんだなあと刺激と感銘を受けてお手伝いしたいと思い、今に至った。親子ともどもいろんな経験と刺激を与えてもらっている。サッカーのつながりというのは本当に凄いですよね。

松下氏も、高校までサッカー経験があるお父さんコーチである。2012年にシンガポールに赴任し半年後に、GFAのスポンサー企業（日系の現地法人）に勤める友人の紹介で長男が入団した。自身も、石本氏と同じように大人のフットサルに週二回参加するようになり、2014年から中村氏に誘われお父さんコーチに就任した。長男が入団する際には、シンガポールにはGFAのほかにアーセナルやアルビレックス新潟シンガポールなどのスクールがあることは知っていたが、最初の体験レッスンで「すぐに気に入った」ので他のスクールを見ることなく入団を決めた。その時の様子を次のように語っている。

自分も小学校の時サッカーをやっていたので、自分のもっているサッカー観と一致した。サッカーの練習もそうですけど、一番は挨拶だとか、サッカー、スポーツに対する向き合い方とか、社会に対する向き合いとかが一致しているところに惹かれた。挨拶するということろがしっかりできているので、コーチの人たちも含めて、だから見ていて気持ちいい良いです。

シンガポール在住8年の青田氏はGFAのお父さんコーチ歴も7年と長い。長男が小学校2年生の時にお父さんコーチに就任し、そのカテゴリーを持ち上がり指導してきた。長男が入団した時は、まだ中村氏は現役のSリーガーであり、本格的なスクール事業を展開する前のことであった。当時、中村氏がお父さんコーチを勧誘した様子を次のように語っている。

たまたま GFA に子どもがはいて、半年後に、自分も日曜の朝に練習に顔を出すようになって、コーチと一言二言話ようになって、そのうちお父さんたちとボールを蹴るようになったんですよ。蹴り始めたお父さんの中で少し経験のある人が中村さんの目にかかって、ちょっと指導してみませんかとおファーがあって。そういうお願いが得意ですよ、中村さんは。

以上のように GFA では、少年サッカースクールに入団する子どもたちだけでなく、家族を巻き込みながら活動を展開している。このような仕組みは、日本ではスポーツ少年団などの地域のスポーツクラブではよく見かけるものであるが、民間企業としてサッカースクール事業を行うクラブでは珍しいものである。それは、サッカー指導というサービスがクラブ経営の根幹に関わるからである。しかし、GFA では積極的にお父さんコーチを登用し、実際にクラブ運営の重要な戦力となっている。シンガポールにおける日本人コミュニティの中に存立するという特殊な状況が影響しているのかもしれないが、前述の「日本的なもの」と同じように、中村氏が求める組織づくりや関係性のあり方がそこには反映されていると考えられる。

“中村さん” というアイコン

中村氏は現地では「アキ」と呼ばれている。筆者が、中村氏に同行してナショナルスタジアムを視察に行った際には、通りかかったシンガポールサッカー協会の関係者や元国家代表選手が笑顔で「アキ！」と声をかけてきた。中村氏の Sリーグでの実績は輝かしいものがある。しかし、それだけではなくシンガポール国内の複数チームでプレーし、また、日本人選手を斡旋するなかで築き上げてきたローカルとの信頼関係がそこにはあるように見受けられた。

また、日本人コミュニティにおいても中村氏に対する厚い信頼がある。GFA のユニフォームにはいくつかのネームスポンサー（日

系の現地法人が多い）がついているが、そのほとんどの契約交渉は中村氏が担っており、スポンサーとの橋渡しをしてくれるのがGFAに家族で関わる駐在員の人たちなのである。このような“応援団”が中村氏のまわりには存在しているのである。

その応援団の一つが前述のお父さんコーチであるが、石本氏が「中村さんのように海外でこんなにチャレンジをしている人がいるんだなあと刺激と感銘を受けてお手伝いしたい」と語るように、また青田氏が「お父さんの中で少し経験のある人が中村さんの目にかかって、ちょっと指導してみませんかとおファーがあつて。そういうお願いが得意ですよ、中村さんは」と語るように、まさに「中村氏だからこそ」形成された“応援団”といえるであろう。

さて、2019年、中村氏はこのように順調に経営してきたGFAを売却し、日本に帰国することを決断した。子どもの教育環境や家族での生活を考え、また父親の跡を継いで電設会社の社長となった兄の勧めもあったからである。帰国後は、兄の会社で働きながら、父親が創設し、兄弟が育った少年サッカークラブをボランティアで指導することとした。

3. スポーツ少年団「上高野少年サッカークラブ」の運営の現状と課題

中村氏の父親が1981年に創設した上高野SCは、幸手市の郊外に位置する上高野小学校の児童を中心に、上高野小学校グラウンドおよび幸手市少年サッカー場を主な活動拠点とするスポーツ少年団である。

中村氏は、帰国してしばらくは指導の手伝いという形で加わっていたが、2020年度からは前クラブ代表の井出氏のあとを引き継いでいる。初代の代表は創設者の中村氏の父親で、その後長い間井出氏が代表を務め、中村氏は3代目となる。

練習会場となる幸手市少年サッカー場は、1985年に小学校跡地（児童数増加に伴い、近隣に移転）の利用に際し、中村氏の父親が町長（当時は幸手町）に陳情し整備されたものである。その頃町では8つの小学校でそれぞれ少年サッカークラブが活動し

ており、その拠点施設としていつでも使えるグラウンドを確保したかったということであった。現在、幸手市の小学校は6校になり、少年サッカークラブも4つに減少した。平日はそれぞれの地域の小学校を使用しているが、週末はクラブ同士で調整しながら少年サッカー場を使用している。学校開放利用では、雨天時や他団体の調整などで活動が制限されることがあるため貴重な練習会場となっている。グラウンドの周りに張り巡らされた防球ネットは地元のネット販売会社から、柱は中村氏の父親から寄贈されたもので、管理棟・トイレ・物置などを幸手市が整備した。管理は、4つの少年サッカークラブで組織する幸手市少年サッカー連絡協議会が行い、市の予算や市サッカー協会から支援を受けて物品等をそろえている。

現在（2020年）のクラブ員数は、1年生3人、2年生9人、3年生6人、4年生7人、5年生12人、6年生12人で合計49名となっている。幸手市及び近隣の市でも少年サッカークラブの数が減少したこともあり、上高野小学校以外の子どもたちが半数以上を占めている。水（ナイター）、土、日曜日を活動日とし、3年生以下2,000円、4年生以上2,500円の月会費を納めることになっている。中村氏が代表に就いてからは、5・6年を宮杉氏（クラブ全体の監督）、3・4年を中村氏、1・2年を大川氏（仮名：ヘッドコーチ）が担当し、各学年にお父さんコーチが張り付いてサポートするという指導体制をとっている。それまではクラブ監督の出井氏のもとに各学年のお父さんコーチが張り付き、各学年の中心なお父さんコーチがヘッドコーチとして学年をまとめるという方式だった。そのため、お父さんコーチの人数や熱心さによって学年の雰囲気が大きく変わり、活動に格差が生じていたという。それを解消するために、高学年・中学年・低学年にそれぞれ専任のヘッドコーチを配置し、そのサポートにお父さんコーチをお願いすることになった。宮杉監督とヘッドコーチには月額、お父さんOBコーチには1回（500円）の謝金があり、お父さんコーチには謝金はない。

クラブの年間行事として、5月の連休中にバーベキュー大会が

あり、コーチ、選手だけでなく、家族やOBたちが集まり親子サッカーやレクリエーションなどを行う。クラブ創設後間もないころから開催しており30年以上続いている行事である。また、育成会（保護者による後援組織）主催による夏合宿やクリスマス会なども行われている。夏合宿はその年の担当学年の保護者が企画することになっており、練習試合を組むこともあればレクリエーションを中心に開催することもある。行先もさまざまであり、旅行会社に外注することもある。クリスマス会では、育成会が豚汁を用意し、選手全員の家族紹介が行われる。このようなサッカーの活動にとどまらない親交的コミュニティの様相は、中村氏がシンガポールのGFAで実践してきた活動の原点となっているのではないと思われる。

中村氏の父親の跡を継いでクラブ代表となった井出氏（調査時70歳）は、37年間上高野SCで監督・代表を務めてきた。クラブ設立2年目（1982年）に長男（中村氏と同級生）が入団するのをきっかけにお父さんコーチになった。学生時代はサッカーの経験はなかったが、就職後に社会人リーグでプレーした。長男が6年生時には監督として、地区予選を勝ち抜き埼玉県大会に出場した。当時のチームには中村氏以外にものちにJリーガーになった選手もおり、進学した地元の中学校のサッカー部では埼玉県で優勝するほどの実力があつた。長男に続き次男も上高野SCに入団した出井氏は、年々サッカーの指導に熱が入るようになった。夏休みには会社に出勤する前に毎日朝練を行い、土日も一日も休まず練習した。また、10年間ほど茨城県に転勤（単身赴任）になったが、その間も毎週土日は自宅に戻り指導にあたっていたという。雨が降らない限り毎週土日はサッカーの指導に費やしていたので、「雨が降ったら家庭サービスをするよ」と妻に言っていたという。

出井氏はこれまでを振り返り、「子どもたちに感謝している」ということを繰り返し語り、現在の状況について次のように述べていた。

本当は孫とボールを蹴りたかったけど、今いる子どもたちがみんな孫みたいなものだから。感謝の気持ちがあるのでやれる。クラブの代表はやめたけれども、顧問として残っており、市サッカー協会の役員も継続している。土日の試合には必ず見に行こうと思っている。子どもの成長が楽しみで、声をかけてあげたい。

一方で、出井氏はクラブが抱える大きな課題としてクラブ員数の減少を挙げている。前述したように、現在は上高野小学校以外の子どもたちを含めて各学年 10 名前後を確保するのが精一杯となっている。これまでも 6 学年合わせて 20 名を切る年もあったという。また、子どもや保護者がクラブを選ぶ時代になり、お当番などの育成会のあり方を見直す時期に来ていると語っていた。クラブの状況やコーチの指導については保護者間で多くの情報が流れており、クラブに対する「評価」を気にかけるようになったという。ボランティアで関わってもらっているお父さんコーチについても、指導方法や指導者間の人間関係などクラブとして統制を取る必要があると感じている。そのため、クラブでは、毎月第一月曜にコーチ会を開催し、サッカー協会からの報告事項のほか子どもたちの状況や指導にする情報を交換している。

クラブ監督の宮杉氏（36 歳）は、お父さんコーチを終えた（長男が卒業した）あとも指導者として残り、中村氏からの強い要望もあって監督を引き受けた。上高野 SC でのコーチ歴は 9 年目（2020 年度）となるが、医療関係の営業職で忙しく、また長男が中学校でサッカーを続けていることもあり、悩みながらクラブ監督を引き受けたという。宮杉氏も、出井氏と同様に育成会やコーチの指導や関係性に関する課題を指摘していたが、以下のコメントに示すように、少年サッカーの指導に携わっていくことに対する悩みも大きいようであった。

毎週土日に休みがなく、平日も他チームとの連絡などの事務仕事や会合が入ってくるので、ある程度家庭を犠牲

にしないとやれない。サッカーの指導者というのは本当に面白いと思うが、そのような犠牲を払ってこのまま続けていけるかは分からない。

4. 少年サッカークラブがローカルであることの意味

2020年7月、国際サッカー連盟（FIFA）に加盟する国と地域は210を数える。国際連合加盟国（国連）の193、国際オリンピック委員会（IOC）が承認する国と地域の206を上回る。J・リーヴァー（1996）は、「国連は現実の国家間衝突を平和裏に解決しようとしているが、亀裂は非常に深く、全世界の統合を達成するのは不可能である」とし、一方「FIFAは、加盟国が受け入れなければならない首尾一貫した拘束力のある一連の基準や規約を確立することで、世界規模の集合意識を形成することに成功する。遊戯の世界の闘争における非難決議は現実には結果をもたらす」とその国際的な役割を高く評価する。

岡田千あき（2014）によると、「スポーツを通じた開発」に関する国際的な情報を集めたサイト『International Platform for Sport and Development』（<https://www.sportanddev.org/en>）では、登録団体524のうち282がサッカーに関わる団体であり、紹介されているプロジェクト200件のうち113件がサッカーに関わる活動となっている。岡田は、内戦中のボスニア・ヘルツェゴヴィナで出会ったサッカー少年に関して「『サッカー』というスポーツに、人々のプライドや生き様を示すかのような大きな存在感と、日常生活に溶け込んできた長い歴史を感じた」と述べている。そして、サッカーの持つ力について「個々の地球規模の課題を解決に導く力を持ち合わせていないのかもしれない。しかし、ミクロな視点から、人々の生活の一部、あるいは生活の中の課題を解決する媒体としてサッカーを捉えるならば、他者とのコミュニケーションの場となったり、ライフスキルの獲得を可能にしたりとといったさまざまな効果が期待できる」と主張する。

このように、グローバル社会の象徴的な立ち位置にあるサッカーは、ローカルな局面で人びとをつなぐ役割を持つと高く評価

されている。J・リーヴァーは「世界でもっとも人気の高い団体スポーツとして、大衆文化のなかで、サッカーほど共同体的経験を生み出すものはない」とし、「サッカーは『スポーツ界のエスペラント語—言語や文化の垣根をものともしない、人間のつながり—形態』と呼ばれてきた」と指摘する。

中村氏は、まさしくサッカーのグローバルな局面で活躍し、サッカーの持つ力で人びとを「つなぐ」ことでGFAのクラブ運営を成功させてきたかのように見受けられる。しかし、そのように「サッカーの持つ力」だけで説明することは妥当なのであろうか。筆者はそれだけではないと考える。このことを理解するためには、帰国後、衰退しつつある地元の上高野SCの運営に携わり続ける状況も含めて検討する必要がある。

上高野SCでは、長年、クラブ代表を務めてきた出井氏が一見家族生活を犠牲にしながら少年サッカーの指導に携わってきたかのようにみえる。また、監督の宮杉氏も、家族のことを考えこのまま続けることができるか悩みながら指導にあたっている。なぜ、そこまで少年サッカーの指導に携わろうとするのであろうか。そこには少年サッカークラブのローカリティがあるのではないかと筆者は考える。結論を先取りすれば、GFAも上高野SCも永く活動を続けてきたことによって当該の地域やコミュニティにおいて「存在」すること自体に意味を持つようになったのではないかとことである。期間限定の駐在員家族を対象とするGFAはもちろんであるが、上高野SCもその会員構成は、上高野小学校から幸手市全域、そして幸手市外へと広がり流動性も高くなりつつある。そのような状況においても、GFAがシンガポールの日本人コミュニティに「存在」すること、上高野SCが上高野校区に「存在」すること自体に意味があり、そこに関わる人びとは当然のように持続させようとするのである。

内山節（2010）は、村社会で形成される小グループを「小さな共同体」と呼び、「共有されたものを持っているから理由を問うことなく守ろうとする。あるいは持続させようとする」という。さらに、「小さな共同体というものを軽くとらえている。とりあ

えずは結びつくグループぐらいに考えておけばよい」と述べており、サッカーというスポーツの気軽さと実体的関係性の在り方が、人々を結びつけていくグループの形成に重要な役割を果たしている」と理解される。

しかし、当然ながら、地域やコミュニティと何のかかわりもなく活動するクラブがそのような「小さな共同体」的な集団として存在するわけではない。利潤目的で創設されたクラブであれば、「儲からなければ」そこから立ち去ることになるであろう。では、上高野 SC のローカリティはどのように形成されてきたのであろうか。一つは、長年の活動を通して形成された象徴的な出来事や人物の存在があり、それが記憶や活動として引き継がれているということである。例えば、中村氏の父親が練習場として提供した「中グラ」もその一つである。クラブの『25 周年記念誌』（2006）には、設立当時は野球が盛んであったため思うように学校のグラウンドが使用できなかったことから、中村氏の父親が自分の土地を提供し自前のグラウンドを作ったことが第一部の「歴史」の頁に記述されている。今では使われなくなったが、この「中グラ」ができたことにより、上高野 SC の活動の特徴である夏休みの「朝練」が始まり今も続いている。また、この『25 周年記念誌』には、各年度の大会成績だけでなく、指導者一覧、会計収支報告、育成会役員一覧など細かな資料が掲載されている。これらの資料は 40 年近くたった現在も作成され引き継がれている。

もう一つは、固定的ではないが一定の領域性を持つということである。少子化に伴い会員を維持するため、またモビリティの発達という社会状況のなか、クラブの対象エリアは拡大していく。しかし、「上高野」という名称のもと、一定の領域、つまり日常的に交流のできる範囲は維持されているのである。その時の社会状況によりその領域は変化するが、そのなかで上高野 SC の活動は認知され、地域に「存在」し続けるのである。

同様のことは、シンガポールの GFA でも指摘できる。本稿では GFA が活動を継続するうえで、「日本的なもの」「お父さんコーチ」「中村さん」というアイコン」が大きな役割を果たし、

「GFA ファミリー」が形成されてきたことを明らかにした。つまり、GFA という少年サッカークラブは、「GFA ファミリー」としてシンガポールの日本人コミュニティのなかにおける「小さな共同体」的な「存在」となり得ていたのではないかとということである。果たして中村氏が、意図してそのような活動のあり様を持ち込んでいったのかということは定かではないが、父親の作った少年サッカークラブとの関りのなかで身に着けたものと思われる。それは、クラブ経営におけるサッカー指導というサービスの提供・享受の関係にとどまらない日常的な関係性である。「中村さん」を中心に繰り返される日常的なやり取りやクラブのさまざまな活動を通して紡ぎだされる関係のあり方を、「GFA ファミリー」に関わる人びとは当然のように持続させようとするのである。サッカーの力ではなく、少年サッカークラブのローカリティが、そこに関わる人びとをつなぎ止め、クラブの持続的な経営を可能にしていると理解される。

上高野 SC において、一度はサッカー指導を断念した中村氏がクラブ運営に関わり始め、出井氏や宮杉氏が簡単に離れることができない理由もそこにあると考えられる。

注

- 1) 本研究では、両クラブに対して下記の期間でフィールドワーク及び聞き取り調査を行った。なお、シンガポール調査については、科学研究費 2012-2014 年度「スポーツ人材育成と社会移動の社会学」（基盤研究 B：24300217，研究代表：甲斐健人）の助成を受けた。

シンガポール GFA：2013 年 6 月～2019 年 2 月

上高野少年 SC：2019 年 2 月～2020 年 9 月

- 2) 当時の会社の人たちとは、シンガポール在住中も定期的に連絡を取り、帰国の際には挨拶に出向くような関係を続けてきた。
- 3) 斎藤氏自身が、シンガポールで駐在員の子どものとしてサッカーをプレーした経験を持つ。

- 4) 2012 年から中村氏、斎藤氏ともに GFA からの給料を受け取るようになった。それまでの中村氏の収入はプロ選手としてのサラリーのみであった。
- 5) 2013 年にデヴィジョン 1（2 部リーグ）の「Eunos」の運営に乗り出した。2014 年の S リーグ昇格を目指していたがリーグ運営のレギュレーションの変更等により断念した。当時は、クラブに GFA のコーチ 4 人が在籍し、GFA のトップチームという位置づけにあった。
- 6) 外務省のデータによると、2017 年の在シンガポール日本人は 36,423 名となっている。駐在員の話によると、シンガポールには日本人向けの店舗や習い事、集まりなどがあり、この日本人コミュニティのなかで生活の大部分を送ることができるという。

文献

- J・リーヴァー（亀山佳明・西山けい子 訳），1996，『サッカー
狂の社会学—ブラジルの社会とスポーツ』世界思想社。
岡田千あき，2014，『サッカーボールひとつで社会を変える—ス
ポーツを通じた社会開発の現場から—』大阪大学出版会。
内山節，2010，『共同体の基礎理論』農山漁村文化協会。

付記

本研究は、JSPS 科研費 18K10859 の助成を受けたものである。